

イケチョウガイの稚貝生産

佐野聡哉・井戸本純一・孝橋賢一

1. 目的

県内で生息個体数が激減している琵琶湖固有種イケチョウガイの系統保存を行い、将来的に真珠養殖に再び活用することを目指して、イケチョウガイの稚貝生産を行った。

2. 方法

令和5年度は親貝として、令和4年4月および令和5年3月に県外の湖から持ち帰った※イケチョウガイを使用した。令和4年に持ち帰った親貝については、令和4年5～6月に当场で幼生を産出した後、県内の内湖または場内の飼育池で飼育していたものである。令和5年4月からは全ての親貝を当场の飼育池に収容して幼生の放出を待った。放出された幼生はナマズに寄生させ、その後ナマズから脱離した稚貝を当场の水槽および3か所の真珠養殖場的水槽で飼育した。真珠養殖場的水槽の飼育管理は真珠養殖業者に任せた。なお、当场が使用する湖水は植物プランクトンを多く含まないため、餌としてクロレラ(培養および市販)を毎日添加した。

※地元漁協の協力を得て採捕を行った。

3. 結果

令和5年4月25日～6月8日のうち16日で幼生放出があり(図1)、そのうち13日はナマズに幼生を寄生させた。ナマズから脱離した稚貝は砂底に直接着底させたため、稚貝が脱離した日や脱離した稚貝の個体数については把握していない。

当场では当初順調に生育し(図2、図3)、8月初旬時点で千個程度の稚貝が生育していたが、8月下旬に殻長1cm程度で大量死し、9月初旬に全滅を確認した(図4)。死亡原因については明らかではないが、30℃近い高水温が原因の1つとなっている可能性がある。

3か所の真珠養殖場的水槽に収容した稚貝も9月までに全滅した。



図1 放出されたイケチョウガイの幼生
殻長 0.2～0.3 mm



図2 脱離直後の稚貝 殻長 0.3 mm (5月18日)

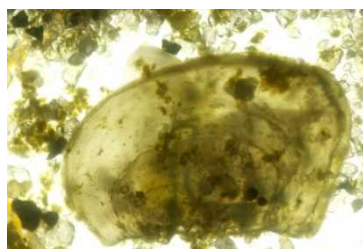


図3 大量死の1週間程前(8月16日)
の稚貝 殻長約1 cm
消化管が餌で満たされているのが確認でき、健康であるように見える。



図4 9月初旬の稚貝の死殻
殻長約1 cm